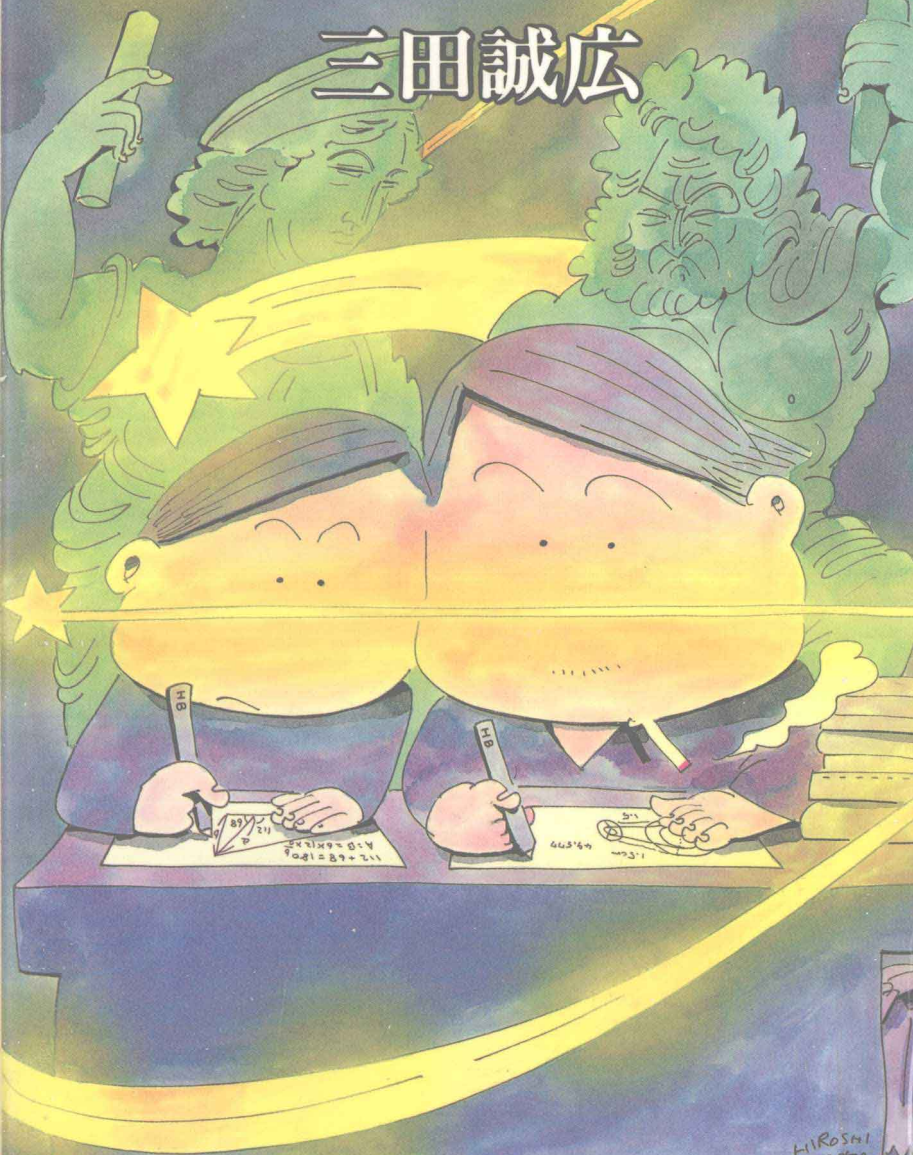


パパは塾長さん

父と子の中学受験

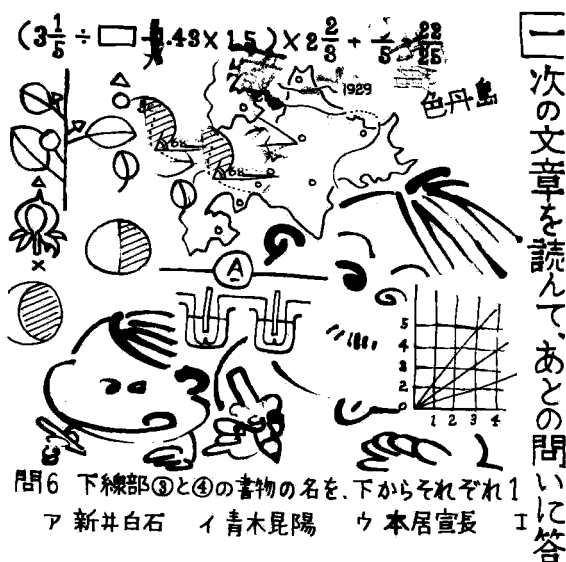
三田誠広



塾長さん

父と子の中学受験

三田誠広



パパは塾長さん 父と子の中学受験

昭和六十三年十月二十日 初版発行
昭和六十三年十二月二十六日 三版発行

著者 三田誠広

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 〇三―四〇四―八六一―(編集)

〇三―四〇四―一二〇―(営業)

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 大日製本印刷株式会社

© 1988 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-309-00529-2

三田誠広(みたまさひろ)

一九四一年、大阪市生まれ。

早稲田大学文学部卒業。

一九六六年、大手前高校在学中に

「Mの世界」で「文藝」学生

小説コンクールに佳作入選。

一九七一年、「僕って何」で第77回

芥川賞を受賞。

目次

はしがき

5

序章 いざ合格発表へ

7

第一章 子供の個性とは不思議なもの

19

第二章 中学受験を決意する

36

第三章 受験勉強を開始する

58

第四章 偏差値とはいったい何だろうか

78

第五章 恐るべき難問に遭遇する

94

第六章 深く考えることの喜び

111

第七章 私が考案した中学選びの指標

129

第八章 果てのない親の「夢」を語る

146

第九章 中学受験とはいったい何なのか

164

第十章 いよいよ入試直前

181

終章 半年の後

198

装
丁

黒鉄
ヒロシ

パパは塾長さん

父と子の中学受験

はしがき

この本は、私の体験記である。

私の次男は今年の二月に私立中学の入学試験を受けた。それまでの二年間、模擬テストなどのお世話にはなったが、私が付きっきりで家庭教師を務めた。何とかして息子を私立中学に入れなければならぬという、一種の危機感を覚えたからだ。

エリート志向とか見栄のために、私立中学を目指したわけではない。昨今の公立中学の現状を見るにつけ、そこに、やりきれないものを感じずにはいられなかった。

私の長男は、公立中学に通っている。現在は三年生だ。三年間にわたって、担任の先生には恵まれたと思っている。また、周囲の先生方のご努力にも、敬意を払っている。だが、制度としての公立中学というものを考えた場合には、不満がある。何かが間違っていると思えない。

最大の問題は、内申書という制度だ。都立高校に進学する場合は、入学試験よりも、内申書の比重の方が高くなる。私立を受験する場合でも、内申書が極端にわるいと、問題になることがある。この内申書というものは、クラス内の相対評価だ。自分が努力しても、級友たちがそれ以上

に努力すれば、成績は上がらない。教室で毎日顔を合わせる級友たちが、「敵」になる。

親しい人間を蹴落として、自分が這い上がろうとする。何ともエゴむきだしの闘いだ。十代前半の多感な時期に、そのような過酷な競争を強いられること。これは大変なストレスではないだろうか。最近話題になっている非行や校内暴力や「いじめ」の問題は、すべてそこから発しているように私には思える。

この本を書いているうちに、中学生による凶悪な事件が、たて続けに起こった。一刻も早く、制度を改めるべきだと私は考える。だが、私が声を大にして叫んだところでどうなるものでもないし、制度というものが、一朝一夕に改善されるわけもない。子供をもつ父としては、現実的な方法を模索しなければならない。結局のところ、私は、次男を私立中学に入れることにした。

子供を私立中学に通わせるためには、初年度だけで百万円、三年間では二百万円以上の費用がかかる。近くにタダで通える公立中学があるのに、なぜお金を払って遠い私立に通うのかという問題もあるが、これはお金を払う親が、その気になりさえすればいい。しかし、私立中学は、ブランド商品を買うようなわけにはいかない。いくらお金を払う気があっても、入学試験に合格しなければ、私立中学に入学することはできないのだ。

この本は、その私立中学入試に向けての、父と子の奮闘の物語である。本の中に登場するエピソードはすべて実話であるし、都内の中学入試に関する情報も折り込んだので、ハウツーものとしても読めるようになっていくけれども、愚かな父と、ふうがわりな息子のコンビによる、一種のユーモア小説、あるいはドタバタの喜劇コメディとして読んでいただければ幸いである。

序章 いざ合格発表へ

空は晴れていた。二月の初めといえは厳寒の季節だが、風も穏やかで、春のような陽気だった。時計が二時を回ると、私は居ても立ってもいられない気分になった。うおーっ、と叫びたいような心境だ。十年前、芥川賞の候補になって発表を待っていた時も、これほど緊張はしなかった。「さて、行くか」

妻と次男に声をかけ、家を出た。

合格発表は午後三時だ。

目標の中学校は、自宅のすぐ近くで、徒歩で十分ほどの道のりだ。急ぐ必要はないのだが、ゆっくり歩こうとしても、足がひとりでにせかせかと先に進んでしまう。

かたわらの次男はと見れば、緊張しきった表情で、私のそばにくっついてる。

親の私がこれほど緊張しているくらいだから、本人が緊張するのも当然だ。

二年近くにわたる奮闘努力のすえに、この日を迎えた。次男も苦しきただろうが、私も、苦しかった。

次男は、塾へ行かなかった。

父親の私が、マンツーマンの家庭教師を務めてきた。言ってみれば、生徒一人の塾であり、私は「塾長」なのだ。

私は「塾」の開設にあたり、妻、および二人の息子に宣言した。

「これからはお父さんのことを『塾長』と呼ぶように」

そのようにして、私の塾長生活は始まったのだ。

もっとも、いまにして思えば、まことに頼りのない塾長であった。

最近の中学入試の問題は途方もなく難しい。小学校の先生でも解けないのではないかと思われる難問もある。塾長としての威厳を保ちたいところではあるけれども、わからないものはどうしようもない。

うむむ、と呻^{うめ}いて考え込んだり、大あわてで参考書を調べたり、不審げに見守る息子の前で醜態をさらけ出すことになった。

教える時間よりも、塾長が考え込んでいる時間の方が長い。いくら考えても、ついにわからない問題もある。問題集の答えを見ても、なぜその答えになるかがわからない。こんな難しい問題を出すのは、「御三家」クラスだろうと思って出題校を見ると、意外にレベルの低い中学だったりする。

妻は本気で心配して、やっぱり、ちゃんとした塾に入れた方がいいのではないか、と言いだした。

「塾長を信用しないのか」

と一蹴したものの、実は、私自身も不安だった。

中学の入試問題がどれくらい難しいか、実際に問題を見たことのない人には、想像もつかないだろう。

親しい編集者や友人に、私が「塾長」になった話をする、と、「ツルカメ算とか、そういうのを教えているのですか」などととぼけたことを言う。

ツルの足が二本で、カメの足が四本で……などというのは、初歩のまた初歩であって、いまだきそんな単純な問題を出す中学はどこにもない。

確かに「ツルカメ算」と称するものは、いまでもある。しかしそれは、例えば次のような問題だ。

学校は8時30分に始まります。A君は8時5分に歩いて学校に向かいました。途中で忘れ物に気づき、走って家にもどり、家には2分いて、出るときに時計を見ると、8時22分でした。あわてて自転車に乗り学校に向かいましたが、今度は自転車がパンクし、1分間で何とかしようとしたが、どうにもならず自転車を置くと、学校まで走り8時30分に着きました。

A君は家から学校まで歩いて18分、走ると9分、自転車だと6分かかります。A君は全部で何分間走ったことになりますか。

これが現代の「ツルカメ算」である。くれぐれも「忘れ物」はしないように、と問題文の主人公(?)に言いかけたいところだ。自転車の整備も怠らないようにしなければならない。整備をちゃんとしないから、こういうややこしい事態が発生するのだ。

それでも「ツルカメ算」なら、私も小学校の時にやった覚えがある。ところが、「ベン図」とか、「N進法」とか、「ニュートン算」になると、見たことも聞いたこともないからお手あげである。

ちなみに「ニュートン算」というのは、高校で習う「微分」を算術で解くようなもので、一定の割合で変化する量が、二種類出てくるところがミソだ。

例えば、ある面積の草地がある。一定の速度で草を食べる牛がいる。何日(あるいは何時間)で草地の草をすべて食べつくすか。それだけなら単純な割り算ですむところだが、牛が草を食べたあとに、一定の割合でまた草が生えてくるのだ。

この問題を解くには、ある種の注文を牛に「お願い」しなければならぬ。朝起きたら、とりあえず前日に新たに生えたり伸びたりしたぶんの草だけを食べてもらうのだ。それから残りのぶんを食べにかかると、話が簡単になる。もっとも、現実にそんな食べ方を牛がしてくれるかどうかは、保証の限りではない。

難しいのは算数ばかりではない。

全国に六カ所ある「新産業都市」と、十五カ所の「工業整備特別地域」を、すべて列举するこ

とができるか。

プランクトンの絵を見て、その名称と、植物性が動物性か、生息するのは淡水か海水か、といった特徴を指摘することができるか。

ジグソーパズルのようにバラバラにされた文章を並べ換えて、意味のある文脈に復元することができるか。

「安政の大獄」の井伊直スケの「スケ」を、正確に漢字で書くことができるか（正解は「弼」）。いや……いちいち挙げていたら、きりがない。

正直のところ、私自身が試験を受けたとしても、合格はおぼつかないだろう。「塾長」としては、失格である。

だが私は、息子を、いわゆる「進学塾」には行かせたくなかった。

小学校の五年、六年ともなれば、夕方近くまで、学校で授業がある。それから塾へ行くのでは、親と子の「触れ合い」の時間がなくなってしまう。

親はなくとも子は育つ、と一般には言われている。確かに、育つことは育つだろう。だが、毎日の生活の場で、心と心の触れ合いがなければ、子供は、私の知らないところで育ち、私の知らない人間になってしまう。

血のつながりというのは、遺伝子に組み込まれた情報が伝達されるだけで、顔や体格が似ているだけのことだ。昔の農業共同体みたいなものがあれば、父から息子へ何かが伝わるといふこともあるだろう。しかし近代社会の、情報が氾濫した都会に生きていれば、子供はたちまち情報に

染まり、別の人間に変身していく。

放っておけば、子供は親とは何のかかわりもない、赤の他人になってしまふ。

それでいい、という考え方もあるだろう。

だが私は、そうは思わなかった。息子は、私の息子であってほしい。

彼らはやがて大人になり、私たちのもとを去っていくことだろう。私は彼らの成長を楽しみにしている。しかし親のもとを巣立ったまま、二度と戻らないというのは困る。私は彼らと「友人」として、末永く付き合いたいのだ。

そのためには、たえず彼らのかたわらにいて、言葉を交わし、彼らの成長を見守っていなければならぬ。

塾などに行かせるわけにはいかないのだ。

とはいうものの、受験というのは、結果が問題である。いくら触れ合いの時間をたっぷりとって、親子の絆ができたとしても、目標の中学に合格してくれなくてはいけない。

私たちの場合、中学受験は、子供にとっての試験であるばかりではなく、親の私にとっても大きな試験だった。

その試験の結果が、今日の合格発表には凝縮している。

私の「塾長」としての能力が、はつきりとしたかたちで判明するわけだ。

塾の指導者に要求されるのは、単に受験に必要な知識を伝授することだけではない。子供の潜在的な能力を引き出すために、厳しく叱責したり、逆に褒めて元気づけたり、愛情表現によって

プレッシャーをかけたり、さまざまな方法論が必要なのだ。

そして何よりも、子供の能力と、努力による向上の度合いを見きわめて、受験する中学を選ぶという、重大な責務がある。

中学受験では、浪人はできない。しかも、受験できる学校は限られている。そこが、難しいところだ。

東京都内の場合、私立中学の受験日は二月一日に集中する。いわゆる「御三家」を始め、多くの私立中学が一斉に試験をするので、かけもち受験ができない。だから、子供の実力レベルを見きわめて、慎重に受験校を選択しなければならないのだ。

半年前、夏休みの頃の次男の成績では、中堅クラスの中学しか受けられないかと思っていたのだが、その後の本人の頑張りで、トップレベルの中学が射程距離に入ってきた。

だがまだ「安全圏」というわけではなかった。おそらく進学塾の指導者などに相談すれば、冒險をせずにランクを一つ落として、絶対確実な中学を受けた方がいいと勧められたに違いない（塾の側は「〇〇中学何名合格」といった実績を必要とするから、親の高望みをたしなめて、安全策を勧める傾向がある）。

二月一日の試験に失敗しても、二次募集の学校などを受験することは可能だが、そういうところには「御三家」を狙ってぎりぎりで落ちた優秀な生徒が殺到するわけだから、かえって難度が高くなる場合がある。

二月一日の試験では、確実に合格するところを受けるべきなのだ。

だが私（および息子）は、冒険することにした。

何と言っても、この学校は、自宅から歩いて行ける。他のところを受けるとすれば、通学に一時間以上かかるところを選ばなければならない。往復で二時間、それが六年間続くわけだから、差は大きい。

もちろん、自宅に近いということだけで、この学校を選んだわけではない。この学校は、M指数（のちに詳述することになるが、中学選びの指標として私が考案した指数で、これが十を超えると中堅校、百以上だと一流校、千以上は超一流校と判断していい）が四百という、極めて優秀な中学なのだ。

自宅の近くにそんな優秀な中学があるのに、わざわざ電車に乗って遠くの中学に行くこともないではないか。それも、超一流校へ通うというならともかく、レベルの低い学校へ満員電車に揺られていくというのでは、本人もつらいだろうし、親の私も面白くない。

受験して落ちたのなら諦めもつくが、最初からランクを落として安全策をとるというのでは、後悔の気持ちが残るような気がした。

そういうわけで、冬休みから一月にかけてのラストスパートの猛勉強と、試験当日の本人の頑張りに期待をかけて、私（および息子）は、この学校にチャレンジすることにしたのだ。

どの程度の可能性があるのかは、わからない。結局のところ、合格するか、落ちるか、確率は五分と五分、という気がする。

結局のところ、これは賭けだ。息子が落ちたとすれば、札の張り方を間違えた私の判断ミスと